

東洋陶磁学会第 47 回大会

研究発表要旨

「北海道における陶磁文化の歴史と特質、そして未来」

2019年7月19日・20日・21日

江別市セラミックアートセンター
江別市野幌公民館研修室

<基調講演>

北海道陶芸の概況と本道における小森忍の軌跡 …………… 兼平一志

<研究発表>

北海道島における本州産須恵器の流通

—5世紀～11世紀— …………… 鈴木琢也

奥羽から見た北海道島—12～14世紀— …………… 飯村均

北海道島における陶磁器流通—12世紀～19世紀— …………… 関根達人

北海道における近代窯業の展開

—箱館焼から小森忍まで— …………… 園部真幸

陶芸・新天地—北からの発信— …………… 中村裕

江別での磁器制作について …………… 北川智浩

北海道から沖縄、そして千葉へ

—自然と風土、故郷と制作について— …………… 高橋朋子

北海道の風土とやきもの …………… 下沢敏也

東洋陶磁学会
江別市教育委員会

兼 平 一 志

北海道の「やきもの」は、今から約 800 年前に土器づくりが終焉して以降、地場産のものは姿を消し、1859（安政 6）年の箱館焼創業まで、実に 630 年余りの空白期間がある。この長い歳月が本道のやきものづくりにとって負の作用をもたらしていると思われる。

本年は箱館焼創業から 160 年を迎え、もはや「北海道の陶芸は歴史がないから」ということは通用しないとされる。

そこで、本道陶芸の現状に対して率直な感想を述べ、次に本道陶芸の幕開けに寄与した小森忍の足跡を振り返るものとする。

本道の陶芸を取り巻く課題として、まず原料のことがあげられる。道内原料の調査研究は、1910 年代から本格化し、1923（大正 12）年の北海道立工業試験場設立以降、2000 年代まで道内原料の調査研究が重ねられた。この結果、道内にはカオリン質粘土、炆器質粘土などの分布が判明している。ただ、その多くは採掘条件が厳しいこと、単味では使用が難しいこと、小規模の窯では試験、精製が困難であることなどから、現在でも道内産原料を扱える窯元はごくわずかである。

課題の二点目は、作り手となる過程が安易となりすぎたことである。陶芸教室の手習い程度で作品を売り出しプロ気分になっていたり、ロクロ成形にもかかわらず、一つひとつ形や寸法の異なる器を商品バリエーションにしていたりするのを見かける。

三点目は、使い手がプライス判断で品物を選択

していること。個々人の価値観ではあるが、「作家さんののは高くて・・・」としてインスタントに作られたものを購入してしまう。使い手にはモノの本質を見極められるようになってほしいものである。

課題の最後は、残念ながら道内には「陶磁器研究者」は存在しないことである。作品鑑賞論や歴史を語れたうえで客観的、学術的に陶芸を見渡せる人材が必要と思われる。

さて、このような状況の本道陶芸において、小森忍（1889 - 1962）の業績を探ろうと思うのだが、残念ながら現状では、それは道内陶芸史に埋没していると感じる。小森は、1949（昭和 24）年に来道し、製陶所の指導や道立工業試験場における道内原料の調査研究、デザインの指導、釉薬試験などを精力的に行い、本道陶芸の近代化に尽力した。また 1951（昭和 26）年の自営後は、道内各所での個展開催のほか、講演活動などを通して道内への陶芸文化の普及に努めた。しかしながら小森が道内で活動した 1950 年代後半～60 年代初頭では、本道に陶芸文化を普及させることは難しく、陶芸が北海道民に浸透し始めるのは陶芸ブームが訪れる 1980 年代以降のことである。この結果、本道においては陶芸ブームが先行し、基礎知識になり得た小森の研究成果が埋もれてしまったのではないかと考えている。いずれにしても、小森が生涯をとおして培ってきた陶芸への科学的アプローチと実践、そしてそれを創造力と交差させた小森忍の「やきもの」を再認識し、北海道陶芸が発展するための礎としていくべきではないだろうか。

《研究発表 1》 北海道島における本州産須恵器の流通—5世紀～11世紀—

鈴木 琢 也

本州産の須恵器は、北海道全域の河川河口域～中流域などに分布する約 220 カ所の遺跡から出土している。これらの須恵器は 5～10 世紀の年代のものであり、須恵器の流通が増加する第 1 の画期は 8 世紀、第 2 の画期は 10 世紀である。

5～6 世紀の須恵器の分布は、北海道南西部～西部の日本海沿岸河川河口域、石狩低地帯の石狩川水系河川下流域の遺跡に僅かにみられ、10 数点の須恵器が出土しているのみである。

8 世紀後半～9 世紀の須恵器の分布は、北海道南西部～西部の日本海沿岸河川河口域、石狩低地帯の石狩川水系河川下流域に集中し、秋田城周辺の窯である秋田市新城窯跡群・古城廻窯跡群(8 世紀後半～9 世紀前半)、秋田県の男鹿市海老沢窯跡群・西海老沢窯跡群(9 世紀後半)で生産されたと考えられる須恵器がみられる。この時期の須恵器の分布は、特に北海道石狩低地帯の遺跡に集中し、秋田(出羽国)産須恵器が多くみられる。また、秋田産須恵器は、青森～北海道の日本海沿岸域の遺跡からも出土している。このことから、秋田産須恵器は、秋田(出羽国)から青森、北海道の日本海沿岸域を経由した「日本海ルート」により、北海道石狩低地帯にもたらされたことが指摘できる。一方、『続日本紀』宝亀十一年(780)条や、『日本三代実録』元慶二年(878)条、『類聚三代格』延暦二十一年(802)太政官符などによると、北海道など北方地域の集団と考えられる渡島蝦夷(狄)が秋田城を訪れ国司等

の主催のもと饗応されていたこと、禁止令がだされるほど毛皮交易が活発に行われていたことがわかる。すなわち、8 世紀後半～9 世紀は北海道擦文文化集団と、出羽国秋田城の律令国家勢力との「日本海ルート」による往来や物流・交易が展開し、本州産須恵器や鉄製品などと北海道産毛皮類との交易が行われていたと考えられる。

10 世紀の須恵器の分布は、北海道全域の河川河口域～下流域、石狩川水系中流域に拡がり、出土数も増加する(一部 11 世紀はじめ頃まで流通していた須恵器もある)。これらの須恵器は、その多くが青森県五所川原窯跡群で生産されたものである。また、10～11 世紀の本州産鉄製品の分布も、五所川原産須恵器と同様に北海道全域の遺跡に拡がる。すなわち、この時期には北海道擦文文化集団と東北地方(北部)土師器文化集団との物流・交易が活発化し、「日本海ルート」に加え「太平洋ルート」による物流が展開していたと考えられる。この時期の北海道全域に及ぶ須恵器や鉄製品の分布の拡がりや数の多さから、この物流・交易は広域的、恒常的に展開されていたものと考えられる。擦文文化集団は恒常的に本州産須恵器や鉄製品などを入手するため本州交易に必要なワシ羽や毛皮類、水産物などの狩猟・漁撈活動および道内外との交易を発展させ、北海道全域はもとより北方四島、サハリンにも文化圏を拡大していく。

《研究発表 2》

奥羽から見た北海道島—12～14 世紀—

飯 村 均

12 世紀に奥羽では平泉藤原氏が台頭し、出土遺

物の傾向から「手づくねかわらけ、白磁水注・四

耳壺、常滑三筋壺、渥美刻画文壺」などを代表として、「平泉セット」が提唱された。その分布から平泉藤原氏の直接的な支配領域を奥六郡から宮城県域とし、福島県域などは外様のであったとされた。そして、近年調査された岩手県宮古市田鎖車堂(たぐさりくるまどう)遺跡や福島県会津坂下町陣が峯(じんがみね)城跡の調査を見ても、その有効性は理解できる。

一方北海道では、厚真町宇隆(うりゅう)1遺跡で出土していた壺が、常滑2型式と再評価され、北海道初の出土例となった。遺跡も経塚の可能性が指摘され、発掘調査も行われ注目をされた。12世紀の常滑の流通を考えると平泉藤原氏の関与が推定され、平泉藤原氏が厚真川中流域まで進出したとも考えられる。同じ厚真町厚幌(あつほろ)ダム建設関連遺跡群では、旧石器時代からアイヌ文化期の遺跡が約20万㎡調査され、13~14世紀のチャシやムラも調査された。この遺跡群の調査成果や、これまでの擦文文化期の物流・交易の研究を踏まえると、厚真川河口部に本州和人の交易拠

点が想定され、前述の遺跡群はアイヌ社会の内陸に向かう交易拠点が推定できる。13~14世紀も鉄鍋・漆器・刀剣類・鉄製品などが豊富に出土し、盛んな物流・交易が行われたことが明らかとなり、鎌倉幕府の関与も想定されるようになった。しかし、前述の遺跡群からは13~14世紀の土器・陶磁器は全く出土していないことから、この時期のアイヌ社会が土器・陶磁器を受容しなかったことが指摘できる。

近年陸奥北部では、渥美壺と法華経が墨書された手づくねかわらけが出土した岩手県奥州市寺ノ上経塚や、宮城県石巻市水沼窯に類似した陶器が出土した青森県平内町白狐塚(びやっこづか)遺跡などで、12世紀の独特の経塚が調査・確認された。「平泉型経塚」と仮称されている。陸奥湾に面する平内町小湊周辺では、この形態の経塚が複数確認でき、平泉藤原氏の流通・交通ルートの可能性が考えられ、小湊を窓口とした北海道太平洋側との物流・交易が考えられ、厚真川河口部へ至る物流・交易ルートが想定できる。

《研究発表3》 北海道島における陶磁器流通—12世紀~19世紀—

関根 達人

北海道島から出土する最古の陶磁器は、12世紀後半から13世紀初頭の珠洲焼や常滑焼の壺が選ばれている点や、日本海側では珠洲焼が多く、太平洋側には常滑焼もみられる点で、同時期の東北地方と共通する。使用者は北海道島に渡った和人で、日本海側では余市と上ノ国周辺、太平洋側では白老と鶴川周辺が交易拠点であったと考えられる。余市は12世紀後半以降、15世紀中頃まで一貫して北海道島最大の交易拠点であった。

北海道島では中国産磁器は13世紀末・14世紀前葉から出土し始める。青磁碗はアイヌ墓や宝物のデポ(埋納遺構)から出土しており、日常的に陶磁器を使う習慣のないアイヌの人々にとっては威信財であったと考えられる。

14世紀中葉から後葉には道南と余市・小樽周辺で陶磁器を出土する遺跡が急増し、珠洲焼に加え、新たに古瀬戸や越前焼が出土するようになる。この時期の余市には、古瀬戸の天目碗・平碗・卸皿、珠洲焼の片口鉢、青磁碗BII類、白磁口髷げ碗など十三湊と共通する陶磁器がみられる。

14世紀末から15世紀中葉には、石狩低地帯のアイヌ集落でも僅かながら陶磁器が出土するようになる。道南では分布の中心が東側の亀田半島から西側の松前半島沿岸部(上ノ国・松前)へと移動する。これは道南の和人勢力の変化を反映しており、十三湊の廃絶とそれに伴う津軽安藤氏の北海道島への敗走に起因する。

15世紀後半から16世紀初頭、道南では上ノ国・

松前とならび、知内川より東側から函館に至る津軽海峡に面した地域（下之国）でも陶磁器が多く出土することから、上之国と下之国の和人の勢力は拮抗状態にあったとみられる。

16世紀前葉から後葉には、余市に替わって瀬田内から陶磁器類が出土し始めるとともに、下国氏の没落と蠣崎氏による覇権の確立を反映し、道南での陶磁器類の出土は松前以西に限定される。また道央の二風谷周辺や道東のチャシからも陶磁器類が出土し始めることから、和人と道央・道東のアイヌの接触が活発化したと推定される。

16世紀末から17世紀前半の陶磁器類は、松前・上ノ国と西蝦夷地の瀬田内へ集中する。蝦夷地の近世陶磁器の出土量は、19世紀前半まで一貫して「西高東低」で推移する。西蝦夷地では17世紀末・

18世紀初頭には、瀬田内に替わり再び余市が主たる交易場となる。余市から出土する17・18世紀代の陶磁器の器種組成は、本州や和人地と大差なく仏具をも含むことから、大半は和人が使用したものとみられる。

一方、東蝦夷地では、18世紀末以前には和人が移住した形跡はほとんど認められず、和人の本格的な進出は、ロシアと幕府との間で国境を巡る問題が顕在化する19世紀代に入る。

蝦夷地で陶磁器流通の「東西格差」が解消するのは、19世紀中葉であり、元々陶磁器を使う習慣のあった本州からの移住者が急激に増えたことと、漁場で和人と共同生活を通してアイヌの人々が日常的に陶磁器を受容するようになったことが、その背景にある。

《研究発表4》 北海道における近代窯業の展開—箱館焼から小森忍まで—

園 部 真 幸

北海道で焼成窯を使った本格的な製陶が始まるのは江戸時代末期のことである。安政5（1858）年箱館谷地頭に築窯し、翌年磁器の焼成に成功した美濃国恵那郡岩村の陶工足立岩次が北海道における陶業の開祖とされる。幕末の箱館ではこの岩次の箱館焼以前にすでに瓦や煉瓦が焼かれていた記録がある。幕末から明治にかけての北海道では製陶だけがひとり歩きをしていたのではなく、蝦夷地（北海道）の開拓を視野に入れた煉瓦など建築材を含めた窯業の地場産業化ということが課題になっていた。

明治5（1872）年開拓使は茂辺地に煉化石製造所を設立、明治13年まで赤煉瓦の生産を行った。明治10年代に入ると札幌に多くの煉瓦工場が設立され、明治21年に竣工した北海道庁本庁舎等の建築のために赤煉瓦が量産された。明治31年北海道炭礦鉄道株式会社（北炭）が炭鉱や鉄道施設の建設資材調達のため野幌煉瓦工場を設立、操業を阿波国出身の久保栄太郎に請け負わせた。その後野幌に

は次々に煉瓦や土管工場が設立され野幌地域は北海道における粘土窯業の中心地となっていった。

明治から大正時代にかけて開拓の進展とともに、陶磁器の需要を当て込んだ多くの陶工が本州から来道し窯を開いた。代表的な陶工として常滑出身で箱館での試行を経て小樽で土場焼を開いた本多桂次郎、京都出身で新十津川焼を皮切りに札幌、函館、室蘭で作陶した泉谷了谷、九谷焼の陶工で新十津川焼を経て札幌で蝦夷焼を開窯、小樽焼などで技術指導を行った松原陶光、京都清水で腕を磨き小樽焼、札幌焼を経て江別の北窯、石狩窯園を指導した市原常次郎らがいる。

昭和に入ると大正12（1923）年に開設した北海道工業試験場による陶工育成の努力が実り、道内出身者の開窯が目立つようになる。しかし、戦前に開窯した窯は一部の窯を例外に、良質な原料土の確保が困難なことや寒冷な気象条件、さらには安価な本州製品の流入といった問題を克服できず、短期間で閉窯に追い込まれていった。

北海道における窯業の特徴の一つは煉瓦工場が副業として製陶を行っていたことである。明治 33 年に野幌に設立された館脇煉瓦工場では甕、大正 14 年に北炭の煉瓦工場を継承して設立された北海道窯業株式会社（北窯）や昭和 7（1932）年に野幌煉瓦株式会社が北窯の設備を継承し昭和 28 年まで操業した石狩陶園（後石狩窯園）では日用食器や花瓶などが作られた。

昭和 24 年、斯界の第一人者であった小森忍（1889-1962）が北海道開発株式会社の顧問として来道する。同社は北海道の産業開発という国策に沿って、昭和 14 年に関西の財界が中心となって出

資設立した会社で、岩見沢と江別に 3 つの窯業工場を運営していた。業績不振により同社工場が閉鎖となったのち、小森は北窯を経て昭和 26 年 4 月北斗窯を開窯、亡くなる昭和 37 年まで江別の地で作陶活動を続けた。

北海道の開発・近代化の過程において製陶を含めた窯業はどのような位置にあったのか、また瀬戸・山茶窯から名古屋製陶所での仕事を通じて機械工業としての窯業の近代化を追求していた小森が北海道において目指したものは何だったのかを考えたい。

《研究発表 5》

陶芸・新天地 —北からの発信—

中 村 裕

北海道は、日本の陶芸産地図では空白の未開の地です。昨年、北海道は北海道命名 150 年を迎えました。幕末の同時期に「箱館焼」により北海道でも本格的な製陶業がスタートしましたが、箱館焼はあまり続きませんでした。その後、釉薬研究の第一人者の小森忍氏が北海道立工業試験場野幌窯業分場に着任し、北海道窯業と陶芸の発展に大きく寄与され、その工業試験場から多くの陶芸研修生が生まれ道内各地で窯を造りました。

そんな中、1968 年に道内の窯元 16 名により北海道陶芸会が発足しました。発足当時は、陶芸ブームにも乗り大変活況がありました。それに併せて地方自治体での陶芸教室、新聞社主催のカルチャー教室などが開かれ一般の方々にも陶芸が身近なものになってきました。当会の構成メンバーも時代と共に変わり、窯元だけだった会から個人作家として独自の窯(焼き)技法、デザインなど研究、工夫し個性豊かな作品を目指す陶芸家の会となって参りました。

北海道は最初に述べたように陶芸産地の歴史のない負の部分がありますが、その反面、産地特有のしがらみのない自由な風土、素晴らしい自然があ

り、未開の地ならではの開拓の魅力があります。

北海道の陶芸家の中には日本各地で修行して戻ってきた方、北海道が好きで窯を築かれた方、教室などを経て独学で窯を持つなど様々な陶芸家が作陶しています。又、今日はネットによる情報社会であり、グローバル化も一層進み海外での出展する方々も出てきました。

2008 年に札幌とアメリカ・ポートランド市が姉妹都市の関係もあり、初めての海外展をポートランド日本庭園にて開催させていただきました。また、当地のオレゴン陶芸家協会主催のショーケースにも展示させていただきましたが、そこで自由な発想で陶芸を楽しみ、日本文化をこよなく愛する方々と出会い心打たれました。



この度、11年振りにポートランド日本庭園にて「Northern Lights-Ceramic Art of Hokkaido Revisited-」に招待いただき展覧会を開催させてい

ただきました。そこでの展覧会の様子、交流活動などをご報告いたします。

《研究発表6》

江別での磁器制作について

北川 智 浩

私は北海道に生まれ、関西の大学を卒業後、27歳の時に「形として残るものづくりがしたい」との思いから、横浜の個人作家の弟子という形で陶芸を学び始めました。陶芸の専門教育をうけないままにこの世界に入り、7年後北海道に移り住んで開窯、現在、個展による発表を中心に活動しています。

仕事場は江別市野幌にあり、設備は0.7m³のガス窯と13Kwの電気窯各1基です。主に磁器の制作、中でも白磁と象嵌反応彩の磁器（磁器素地にクロム象嵌を施し焼成で釉薬と反応させる技法を応用したもので“桃白磁”〈とうはくじ〉と呼んでいます）の制作に取り組んでいます。

白磁は生まれ育った道東や工房のある江別の冬の自然のカタチ（氷柱、流水、氷）をモチーフに、“より冷涼でシャープな形”を、一方桃白磁は、“あ

たたかみと柔らかさ”のある作品を目指しています。いずれも磁器素材での新たな表現になればと考えています。北海道に移り住み、原料を取り寄せて北海道で焼く事の意味に思い悩みつつも、磁器の制作や現在の制作コンセプトにたどり着くまで考えたことを素直に記したいと思います。

一方、北海道では1980年に（公社）日本工芸会の地域組織である北海道研究会が発足しました。1961年に始まる伝統工芸新作展（現在の東日本伝統工芸展）は1973年に第1回札幌巡回展として道内で初開催され、1976年（札幌4回展）より道内作家4名の入選者が出ており、今年第39回展が開催されました。北海道研究会の会員は現在21名で12名の陶芸家が所属、北海道内における工芸の現況も合わせて報告したいと思います。

《研究発表7》北海道から沖縄、そして千葉へ—自然と風土、故郷と制作について—

高橋 朋子

「北海道から沖縄、そして千葉へ」「自然と風土」をキーワードに、私が作家として育まれた背景を辿りながら、制作内容（素材の選択や独自の技法）現在の作品が生まれた経緯などを紹介する。

1. 「沖縄時代」1992-1999

①大学生時代—土器、土もの制作（沖縄の自然と風土、原土との出会い）。

②大学院時代—磁器制作、釉裏金彩の研究（北出

不二雄先生、川原康孝先生との出会い）。

③工房勤務時代—数もの、量産制作。

2. 「千葉時代」1999-2019

①図工美術・非常勤時代—様々な素材、表現技法の試行錯誤、研究。

・minamoの技法の着想と精度をあげるための試験について。

・釉裏金彩から独自の金銀彩の技法への変化と試行錯誤について。

- ②2011. 3. 11 震災以降—作家として独立。
- ・ minamo、金銀彩の技法、その他の作品の深化と進化。
3. 「創造の源としての故郷。現在とこれから、課題」
- ・ minamo の表現技法の進化について。
 - ・ 独自の金銀彩（蒼掌、暁、月暈、遊ぶ月、黒銀

彩、パッチワーク紋様など）技法の進化について。

以上、大きく3項目を軸に、制作内容や作品の変容を辿りつつ、またそれらの作品のイメージのソースや、ルーツとなった故郷北海道の自然と風土についても、画像を使って紹介したいと思う。

《研究発表 8》

北海道の風土とやきもの

下 沢 敏 也

北海道は焼き物の産地が育たない土地という印象がある。北海道の焼き物は、函館焼、小樽焼、札幌焼と窯は存在した歴史があるが長くは続かなかった。その背景にはやはり北国という環境と地理的な問題があったのだろう。

現状では、北海道にはプロ、セミプロ合わせおおよそ700名ほどの陶芸家が活動していると推測する。北海道には広大な土地がありそして本州と違い伝統的なものに縛られる事がない分、自由に制作ができる環境にあるとも言える。

陶芸愛好家（アマチュア）の方々には各地のサークル等もあり数多くいると思う。美術系団体や陶芸団体もいくつか存在し様々な活動をしている。そのひとつが、「北海道陶芸協会・会長奥岡茂雄」（昭和46年設立）である。セミプロや道内愛好家約800名が登録している。主な活動内容は、48回を迎える「公募・北海道陶芸展」、37回の「公募・北海道シニア陶芸展」、年3回会報誌の発行など北海道の陶芸愛好家の為の情報提供やスキルアップ・ワークショップを各地で開催し道内の陶芸の底辺を広げることに力を注いでいる。

・ 土壌から見た北海道の焼き物

北海道は焼き物の産地ではないため、粘土や原料を製造する業者は無い。焼き物の基本的な考え方は土や原料のある所に当然焼き物の産地が育つ。本来作家が土を採取し精製し使うというのが焼き物の本質であろうと考える。

無論作家自身の作品の方向性や考え方によっては一概にいう事は出来ないが、前述のように風土の問題があったのではないだろうか。

しかし北海道の風土に眼を向けると、広大な土地には焼き物に使える多くの土や原料が存在する。それを求め道外から土や環境を求めて北海道に移住してくる作家、本州の学校や窯元で学び地元の北海道に戻り窯を開き独立するとうい傾向も多くある。

もう一つには、作家が集まり会を立ち上げ、地元の土を採取し実際に使うための意識を高める動きもある。それは非常に画期的で焼物の本質が存在すると思う。

自も長年地元の土を使い制作しているので面白さや魅力は理解しているが、土壌としてはまだまだ未開である。産業としての陶芸を継続して行くには難しい風土ではあるかもしれないが、あらゆる点で今後十分に発展して行く可能性があるはずである。

・ 北海道の風土から生まれた表現作品

作家それぞれ独自の技法や焼成方法で北海道らしい焼き物も多数制作されている。

氷点下の中で釉をかける事で凍紋を発生させる技法や北の風土に根ざした力強い焼き物も多数生まれており、そこに本質性や精神性が存在していると感じている。